



# いそしぎ



そらの珊瑚



あの夏、私は恋をしていた

それは最初から終わりを知っていた恋

今でも、さざなみのように、繰り返して見るのは、こんな夢……



泳ぐのにはまだ早い、夏の初めの砂浜は足に心地よかった

私は履いていたエスパドリーユを脱いで右手からぶら下げ、左手であなたの手とつなぎ、歩いている

もうどれくらい歩いたのだろうか

ふり返ると、二人の足跡が続いている

点々と

恋という名のもとに、共犯者になった二人の軌跡

突然の事故にのように出会い、知らず知らずのうちに、あなたを好きになっていったけれど、並んで歩けることが嬉しかった

「今夜は帰らないで」と泣いた夜

寄り添っていた足跡がしばらく離れた

それでも また逢いたくなって

だって砂浜を歩くのは、一人ではとてもやっかいなもの

いそぎみみたいに、とても自由には飛びまわれないわ、あなたの手がなかったら

色の抜け落ちたような銀色の流木が、まるで椅子のオブジェのようにあった

それは美しい骸のようでもあった

「座ってみない？」

二人で座ると、ちょっとぐらぐらした

あなたは決して先を急がない人だった  
私はそれがもどかしく感じることもあったけれど、今なら分かる  
あなたが先を急ぎたくなかった理由  
その理由は砂浜に埋まっていた

手から零れ落ちるあまたの砂粒は、よく見ると全てがなんらかの形を成している  
ひらがな、カタカナ、漢字、アルファベットに数字。膨大な組み合わせができるパズルみたい  
選んだ言葉の後ろにはその何倍もの選ばなかった言葉がある

「好きだよ」  
「君は白が一番似合う」  
「日本一？ 世界一？ 宇宙一？ 誰よりも？」  
「それなら、私、あなたと逢う時は、いつも白い服を着るわ。きっとそうするわ」  
けれど、ずっと一緒にいようとは言わなかったね  
あなたはあの抜けるように青い空のように、憎らしいくらいに正直な人だった

選んだ言葉は空中に漂い、いつしか、いそしぎのように、遠くの国へ飛んでいった  
選ばれなかった言葉は

「きゅっきゅっ」  
ほら、歩くと鳴き砂みたいに、肩を寄せ合い、慰めあっている

ふいに、私は波と遊びたくなって、波打ち際に駆け寄る  
潮風がノースリーブの白いワンピースの裾をひるがえした  
じっとしていると、足の裏を波がくすぐっていく  
寄る波と返す波  
徐々に私の足の裏の砂地を削っていく  
危うい三角錐の上に立っている気分  
ぐらぐらして、ついに、よろめく  
それでも白い波頭は、繰り返すことを止めない

さ、  
よ、  
う、  
な、  
ら、

波頭は予期していた言葉を連れてやってきた  
ここは恋を埋めた砂浜

今さら掘ってみたって、愛なんて言葉は見つからない。  
振り向いて、あなたを探しても、そこにあるのは流木だけだった  
座りたいなら座っていいよ、と流木は語りかけてくる  
でも、やめとく  
流木に一人で座るのは、さみしすぎるから

遠い異国に渡りそびれたいそしぎが、短いくちばしで、無邪気に砂を掘り返していた  
そう、飽きるまで、そうやって、何度でも……

あの夏、私は恋をしていた